認知症の診断と治療に関する アンケート結果発表

鈴木　和代
認知症の人と家族の会　調査研究専門委員会委員長
兵庫県立大学大学院看護学研究科　博士後期課程

2014年9月16日　メディアセミナー

1

調査の概要

目 的：

認知症の診断にかかる期間とそのプロセスにおける経験の実態を把握し、早期診断に向けての課題を明らかにする。

方 法：自記式アンケートを配布

対 象：「認知症の人と家族の会」の会員である、
認知症の人とその家族。
介護経験が５年以内程度の介護家族に回答を依頼。
470通配布し、465通回収（回収率98.9%）。

期 間：2013年9月1日～10月31日の2ヵ月間

実 施：認知症の人と家族の会　調査研究専門委員会　作業部会

2

対象者の背景①

◇認知症の人（患者さん）のご家族（回答者）の背景

74%が女性、夫や母を介護している人が半数であった。

60代が最も多く全体の4割を占めていた。

◇患者さんの背景

72.5%がアルツハイマー型認知症で他の疾患に比べて

圧倒的に多かった。

確定診断時の年齢は75～84歳が最多で34.8%、
64歳以下は24.5%だった。

3

対象者の背景②

◇認知症を疑うきっかけとなるような変化

「忘れ物、物忘れ、置き忘れを頻繁にするようになった」74.6%

「時間や日にちが分からなくなった」52.9%

「仕事や家事が以前のように
できなくなり支障を来すようになった」46.7%

◇最初に受診した医療機関

「かかりつけ医」22.2%「神経内科」20.4%「もの忘れ外来」15.1%

◇認知症以外の診断を受けた経験

「ない」が68.0%
「ある」が20.4%　→　受けた診断名は「うつ病」が44.2%で最多
「ある」と答えた人は64歳以下に限ると22.4%と若干多い傾向

4

結果１
診断までにどのくらいの期間かかったか？

あれ？何かおかしいな

医療機関を受診

原因疾患の確定診断

変化に気づいてから最初の受診まで	最初の受診から確定診断まで
平均１５．０ヵ月	

変化に気づいてから、確定診断を受けるまでの期間は、

平均15.0ヵ月であった。

n=361

確定診断時64歳未満の場合、
受診までに1年以上かかっている人の割合が多い。

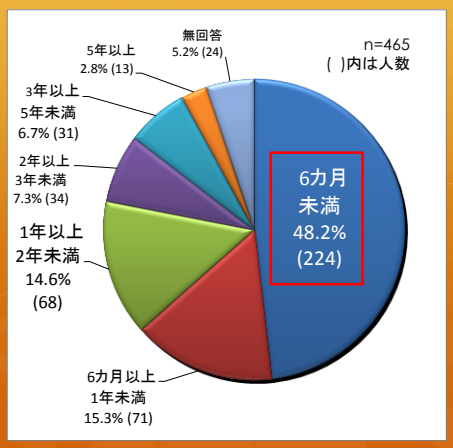
5

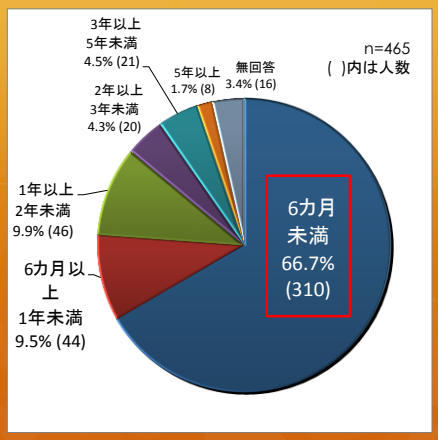
受診までと、受診してから診断までの期間

変化に気づいてから最初に医療機関を受診するまでにかかった期間　平均9．5ヵ月

64歳以下はやや長い

最初の受診から確定診断までにかかった期間平均6．0ヵ月

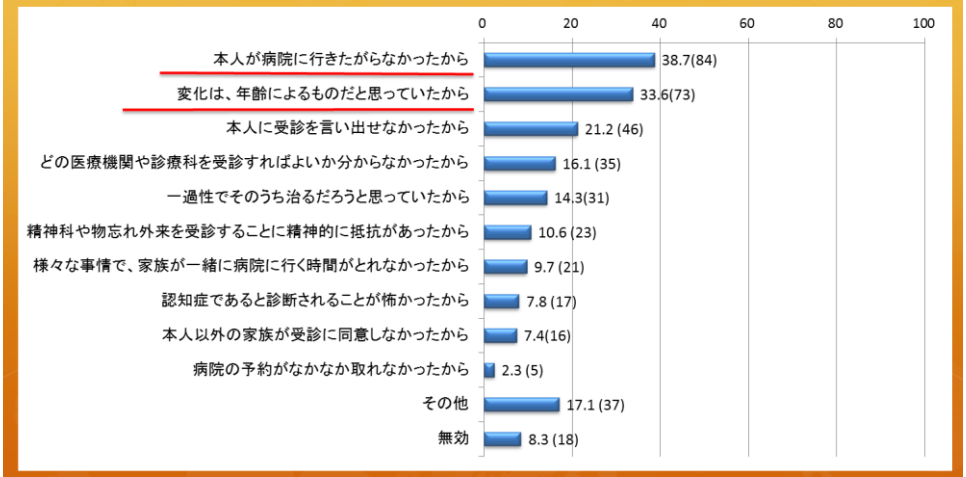




6

結果２
確定診断まで期間がかかった理由（受診まで）

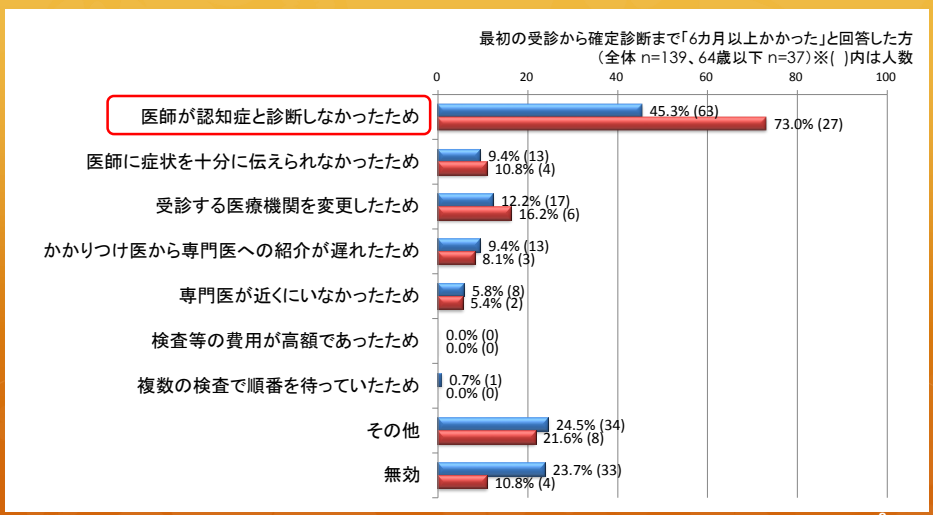
◇受診するまでの理由で多かったもの



※64歳以下では「精神科や物忘れ外来受診に精神的な抵抗があった」「どの科を受診すれば良いのか分からなかった」　が多かった。

結果２
確定診断まで期間がかかった理由（受診後）

◇受診してから確定診断まで（棒グラフ　青＝全体、赤＝64歳以下）



「確定診断」をめぐる状況

◇調査では「特定の認知症と確定診断されること」を確定診断として

アンケートを作成、配布した。

◇結果の分析過程で「認知症と診断された時点」を「確定診断」と

捉えて回答している回答者がいることが判明。両者の定義の曖昧さが原因。

◇認知症と診断されても、専門の医療機関で原因疾患の確定をしないままの

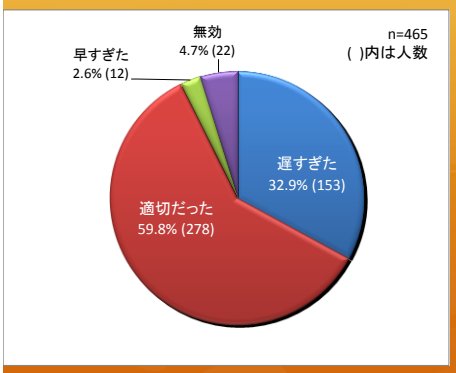
場合もある。適切な対応をするためには、原因疾患の確定が必要である。

「認知症の診断を受けること」と「認知症の原因疾患の確定診断を受けること」は異なる。従って、「原因疾患の診断」を受けることを認知症の「確定診断」とする必要がある。この違いと、確定診断の必要性について、本調査を機会に周知するべきであると考える。

9

結果３
診断までの時期は適切か？

◇確定診断までの時期に対する「回答者の評価」



「認知症ご本人にとって認知症と診断された時期はどうだったか？」

「遅すぎた」32.9%

「適切だった」約60%

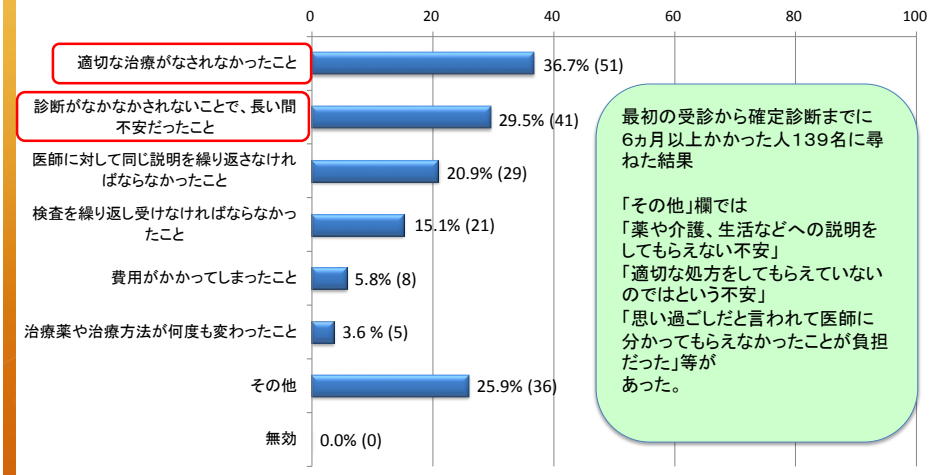
最初の受診から確定診断までに半年以上かかった人が「遅い」と感じた理由は

「かかりつけ医から専門医への紹介が遅れたこと」が多かった。

10

結果４
期間がかかったことによる負担

最初の受診から確定診断まで「6カ月以上かかった」と回答した方（n=139）※（ ）内は人数

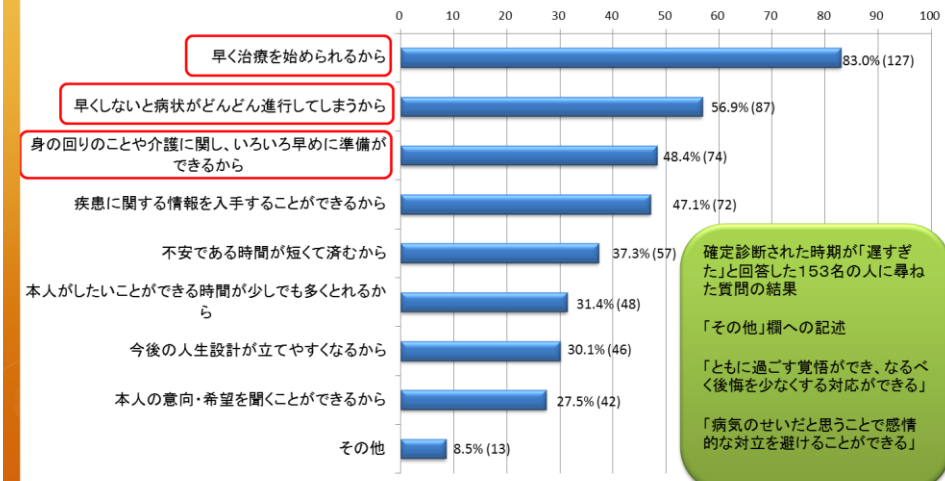


最初の受診から確定診断までに6ヵ月以上かかった人139名に尋ねた結果

「その他」欄では
「薬や介護、生活などへの説明をしてもらえない不安」
「適切な処方をしてもらえていないのではという不安」
「思い過ごしだと言われて医師に分かってもらえなかったことが負担だった」等が
あった。

結果５
早期診断に対する期待

患者さんにとって認知症と確定診断された時期は「遅すぎた」と回答した方　n=153　※（ ）内は人数



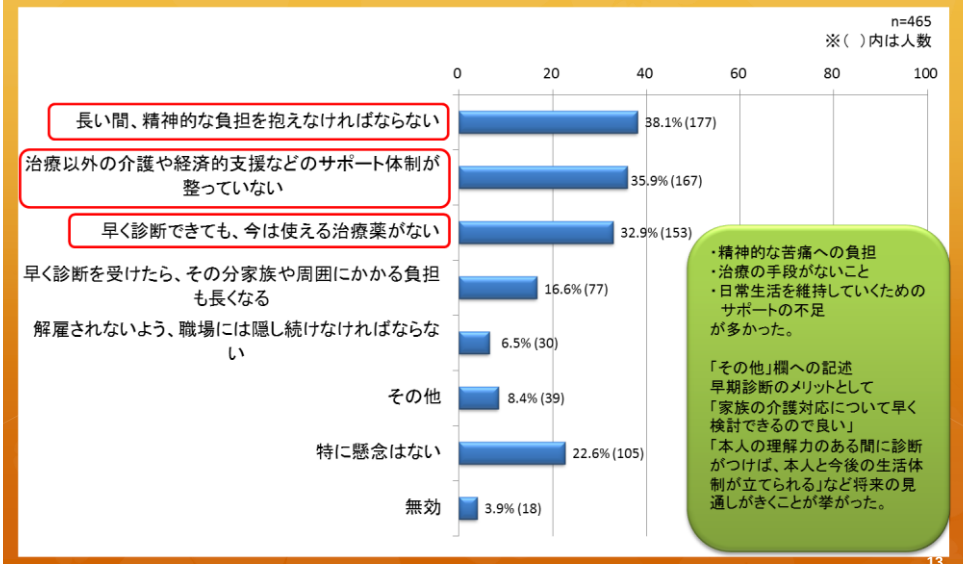
確定診断された時期が「遅すぎた」と回答した153名の人に尋ねた質問の結果

「その他」欄への記述

「ともに過ごす覚悟ができ、なるべく後悔を少なくする対応ができる」

「病気のせいだと思うことで感情的な対立を避けることができる」

結果５
より早期の診断が可能となった場合の課題は？

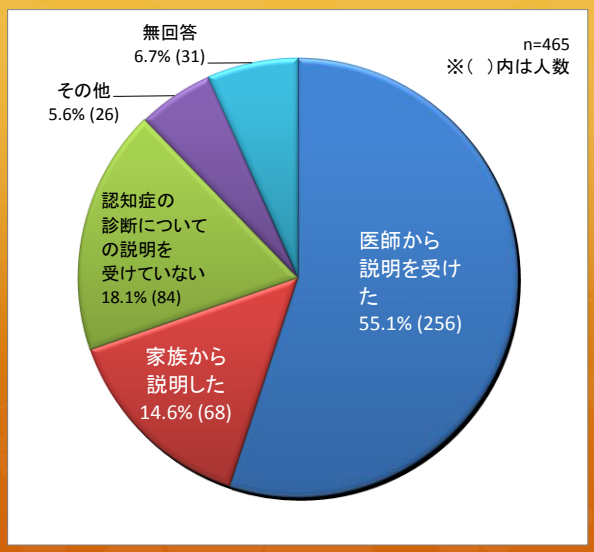


・精神的な苦痛への負担
・治療の手段がないこと
・日常生活を維持していくためのサポートの不足
が多かった。

「その他」欄への記述
早期診断のメリットとして
「家族の介護対応について早く検討できるので良い」
「本人の理解力のある間に診断がつけば、本人と今後の生活体制が立てられる」など将来の見通しがきくことが挙がった。

13

結果６
病気の説明を誰から受けたか？

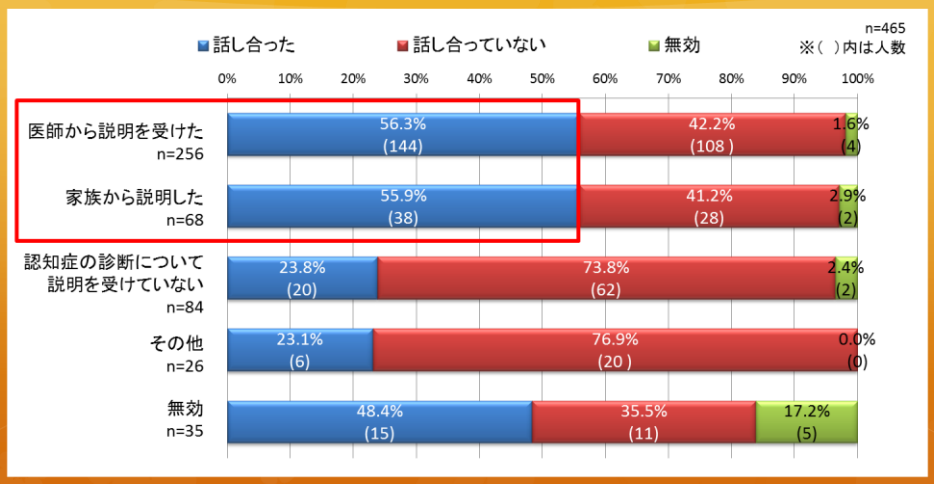


64歳以下（114名）の場合、
「医師から説明を受けた」
・・・74・6%
「家族から説明した」
・・・8．8%
「説明を受けていない」
・・・5．3%

となり、医師から説明を受けた人の割合が高く、説明を受けていない割合が少ない。

14

結果７
「告知」と「家族との話し合い」の関係



患者さんに真実を伝えること（告知）は、その後の生活を家族で話し合うことにつながっている。

15

まとめ

１．認知症の人が「変化」を感じて認知症の「確定診断」を受けるまでの期間は、平均１５ヵ月で、予想よりも短い傾向にあった。

２．しかし、「認知症と診断されること」と「認知症の原因疾患の確定」との違いが不明瞭な調査であったため、「初診から原因疾患の確定」までにはより長い期間がかかっているかも知れない。

３．確定診断までに時間がかかった理由は「年齢によるものとの判断」や「本人が拒否した」、「医師が認知症と診断しなかった」が多かった。

４．確定診断までに６ヵ月以上かかった人の負担は「精神的な不安」や「適切な治療ができなかった」ことが多かった。

５．より早期の診断を望む理由は「早く治療を始められる」「身の回りや介護の準備が早めにできる」が多かった。

６．より早期の診断が可能となった場合の課題は「長い間精神的負担を抱える」「使える治療薬がない」「生活や介護のサポート体制が整っていない」が多かった。

16

より早期の診断へ向けての提言

1. 認知症に対する人々の理解が進み、偏見に傷つく恐れのない社会が実現されること、そして仕事や暮らしにサポートが受けられる社会の実現は、早期診断を実現するための土台である。
もし疑わしい症状があった時には、迷わずすぐに受診できることで、受診までの時期は短縮し、治療や対応への見通しがつく。

2. どこを受診したとしても、認知症か否かについて丁寧な説明を受けられること、そして認知症の原因疾患の確定診断を受けることが保障されるべきである。

3. 早期診断により「早く治療が開始できること」「早期から適切な対応ができること」が重要。早期からの周囲の適切な治療と対応は、本人らしい生活を維持していくために必要で、それ以後の本人の穏やかな暮らしと人生に寄与する。

17